

調査報告書

国際関係論専攻

B1666781

SUN Jiarui

本報告書は、筆者が2017年8月に中国・吉林省で行った調査の過程と成果をまとめたものである。

一、調査過程

予定の調査地である松原市は7月に地震が発生したため、調査の日程を調整した。以下は具体的な日程である。

2017年8月20日（日）

東京から出発し、長春に到着した。

2017年8月21日（月）

午前10:00-12:00頃、親戚に紹介された張さんをインタビューした。張さんは山東省出身の90歳の男性である。長春で育った張さんは、語りに混乱があったが、日本人よりはロシア人のほうが東北人にとって直接的に加害したことを繰り返し強調していた。長春には複数の民族が暮らしていたが、張さんから見れば、みんな「討生活的」（労働者）であり、民族的な差異がなかった。さらに張さんの語りに特徴的であるのは、俗語と歌曲が多いことである。インタビューの中で、名歌手・周璇の歌を何曲も歌った。

午後14:00-17:00頃、吉林省図書館で文献の所蔵状況を調査に行った。『満洲日報』『吉長日報』など、満洲国時代の新聞を所蔵しているが、館員に閲覧を拒否された。交渉後、30分程度『満洲報』を閲覧した。『満洲報』は西片朝三によって創設された、1922年から1937年まで存続した新聞である。

夜、20:00-22:00頃、何さんにインタビューした。何さんには2014年からインタビューし続けたため、今回は追加インタビューである。何さんは、自分の家族が満洲人である、蒙古人ではないことを、習慣と結婚対象から主張していた。さらに、祖母の葬式の様子を詳しく語っていた。

2017年8月22日（火）

吉林省博物館に見学に行く予定だったが、原因不明な閉館だったため行けなかった。インタビューの文字起こしをした。

2017年8月23日（水）

長春から松原へ移動した。午前、地元の学者である王昭全さんと王国学さんと面会した。王昭全さんは、扶余県の歴史をテーマとする論文と共著がある。しかし、それらの多数は、公開出版されていない状態にある。今回は、王昭全さんと連絡先を交換し、交流し

ようと約束した。調査から戻った一週間後、メールで王昭全さんから未公表の論文 12 本をもらった。それらは学術論文とは言いがたい（引用は明記されていない）ため、修士論文に引用しなかったが、現地の知識人がふるさとの歴史をいかに捉えるかを確認できる。

続いて、王国学さんと会った。『伯都訥史話』など、扶余県の歴史に関する内部出版の書物を 5 冊いただいた。

午後 14:00-15:00 頃、徐さんをインタビューした。徐さんは、扶余県出身の 82 歳漢族女性である。貧乏な漁家に生まれた彼女は、母親が赤ちゃんを捨てるや、コレラの流行の中で治療の方法がなくて死を待つなど、普通の民衆の惨状を語り、その時代を生き残る自身の強さを誇った。

夜、長春に戻った。インタビューの文字起こしをした。

2017 年 8 月 24 日（木）

午前、吉林省博物館に見学した。大半が閉まっている状態だった。午後、偽満洲国皇宮に見学した。出口に紙と筆が置かれ、見学者に感想を書かせる。「愛我中華」「振興中華」という感想が多かった。

夜 18 :00-21:00、引き続き何さんにインタビューを行った。何さんは、扶余県の満洲人家族「老百家」の状況を語っていた。さらに家族の分家の歴史を語っていた。最後に、何さん自身が扶余県の人大・政協の代表に選ばれたことを語った。

2017 年 8 月 25 日-26 日（木）

帰省中、インタビューの文字起こしをした。

2017 年 8 月 27 日（木）

東京に戻った。

二、調査成果

今回の調査成果としてあげられるのは、まず張さんと徐さんのインタビューから、近代中国東北に置いて普通の人々はどのような生活を送っていたかをイメージできることである。また、王昭全さんと王国学さんからもらった文字資料は、扶余県の歴史の整理に役に立ったことである。最後に、今回の何さんの語りを中心に、修士論文を作成したことである。

特に、何さんの語りを整理した結果、扶余県という地域社会に存在した、「旗人コミュニティ」「満蒙ネットワーク」「蒙古親族ネットワーク」という三つの共同体を析出した。10 月の修士論文中間報告ではこのメゾレベルの分析を行った。それから、統治権力（マクロ）と個人（ミクロ）レベルの分析を加え、修士論文「近代中国東北における『蒙古旗の満洲人』の民族アイデンティティ—吉林省扶余県『老何家』を事例にして—」を作成した。